



若年母親グループにおける住民ボランティアの子育て支援：
ボランティアが持つ若年母親への認識の変化に着目して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大川, 聡子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005512

資 料

若年母親グループにおける住民ボランティアの子育て支援 —ボランティアが持つ若年母親への認識の変化に着目して

Parenting support of community volunteers in the teenage mothers group; Focus on revising volunteer's perception of teenage mothers

大川 聡子

Satoko OKAWA

キーワード：若年母親, グループ支援, 住民ボランティア, 子育て支援

Keywords: teenage mother, support group, community volunteers, parenting support

要 旨

本研究は、住民ボランティアの若年母親に対する認識と支援について明らかにすることを目的とし、若年母親グループに参加する住民ボランティアにインタビュー調査を行なった。

ボランティアは、《母親役割を重視して若年母親をとらえる》ことと、《10代であることを重視して若年母親をとらえる》という、「10代」と「母親」というそれぞれの役割期待の中で葛藤している様子が見られた。一方で、母親に〈どのようにとらえられているのかを知りたい〉という思いはあるが、《拒絶されることへの恐れ》から、積極的に関わることができない状況にあった。しかし、直接的な関わりはできなくとも、〈子どもを見守ることがボランティアとしての役割〉と考え、〈ほっとできる場づくりに徹する〉ことで、ボランティアは若年母親を間接的に支援していた。

このような地域住民が若年母親の実態を知る機会を作り、継続的に実施していくことが、若年母親の育児支援の一つとして重要である。

I. はじめに

2012年の日本の若年母親¹⁾の出生数は、12,770人(人口動態統計)であり、全出生数に占める出生割合は1.23%と少数である。10代での妊娠・出産はその後の生活に大きな「社会的リスク(経済的な不安定、配偶関係の不安定、家族との疎遠、母親としての未熟性を指している)」を抱えていく可能性が高い(定月, 2009)とされている。

こうした状況にある若年母親の特徴を明らかにするために、筆者が若年母親に実態調査を行なった結果、他者に母親として認められることの困難さについて、多くの意見が述べられた。その

理由として、年上の母親達との関係作りが困難なこと、周囲から児童虐待のリスク要因としてとらえられていることが挙げられた(大川, 2010)。Marshallら(1992)は、社会的ネットワークからのソーシャルサポートがあることが、親の効力感を高めることを明らかにしている。このことから、地域住民が若年母親に対する理解を深める地域づくりが、若年母親の育児支援において重要であると考えた。

海外に目を向けると、アメリカでは妊娠後期から産後6か月間、ボランティアが若年母親の家庭に継続訪問を実施し、訪問を受けた母親は子どもに対する理解が深まり、母子相互作用が円滑に行

われていることが報告されている (Barnet et al., 2002)。イギリスでは、10代母親自身がボランティアとして地域活動に参加している事例もみられる。ボランティア参加に関しては、時間の制約や人種差別、地域に対する外部からの差別など様々な困難があったが、こうした地域に根差した実践が、10代母親の社会的包摂のための個人的、社会的、政治的な障壁をなくす可能性を生み出している (Greene, 2007) という。このように、海外では若年母親にボランティアが関わることのメリットや、様々な困難の中で若年母親が地域活動を行う効果についても検討されている。

筆者が2004年からフィールドワークを行っている若年母親のサポートグループ「Z」には、地域の更生保護女性会メンバーが保育ボランティアとして参加していた。そこでは、ボランティアをする側-される側、という関係だけでなく、母親として同じ土俵の上に立ち、共に学びあう、ボトムアップ的な関わりがグループの中で自然に行われていた。

本研究では、こうした場に参加するボランティアの若年母親に対する認識と支援について明らかにし、若年母親を支える地域づくりについて考察する。

II. 研究目的

本研究では、若年母親サポートグループ「Z」に保育ボランティアとして参加している更生保護女性会メンバーへのインタビューを行い、住民ボランティアの若年母親に対する認識と支援について明らかにする。その内容から、若年母親を支える地域づくりについて考察する。

III. 研究方法

1. グループ「Z」の概要

グループ「Z」は若年出産した母親を対象に、「子育てに関する知識や技術の取得、母性を形成すること」を目的に、保健師が主体となり200X年に発足した。毎月1回2時間程度、X市保健センターで開催されている。2008年度の参加人数は5~14組であった。「Z」のスタッフは、保健師、保育士、助産師、栄養士、ボランティアなどである。ボランティア、保健師、保育士は主に育児を担当し、助産師、栄養士、保健師はプログラムを担当する。毎月のプログラムはメンバーによって決められ、運動会、クリスマス会等季節の催しを重視し、内容は多岐にわたる。終了後にはスタッ

フ間でミーティングを行い、参加者の情報を共有している。

2. グループ「Z」におけるボランティアの関わり

グループ「Z」は、子どもの保育を地域住民ボランティア団体である更生保護女性会に依頼している。更生保護女性会は、地域社会の犯罪・非行の未然防止のための啓発活動を行うとともに、青少年の健全な育成を助け、犯罪をした人や非行のある少年の改善更生に協力することを目的とするボランティア団体である。更生保護女性会は地域に根付いており、若年母親と生活圏域を同じにすることから接点も多い。

母親とボランティアの関わりとしては、調理実習開始時に子どもを預かる時と、終了後母親に子どもを渡す時である。ボランティアは、グループ「Z」開始当初から2009年3月まで毎月3~5名が参加し、子どもの保育を担当していた。

3. データ収集方法

データ収集方法は、2008年1月に半構造的質問紙を用いてグループインタビューを行った。対象者の選定は、当月ボランティアに参加していた3名に依頼し、了解の得られた3名全員を対象者とした。インタビュー時間は約60分であった。インタビューの内容は、対象者の年齢、子育て経験の有無、育児支援の経験(年数・内容)、グループ「Z」のボランティアを始めた経緯、関わり始めた時期、グループ「Z」参加当初の母親・子どもの印象、最近の母親・子どもの印象、グループ「Z」の子ども達に関わる上で、特に気をつけていること、10代で出産した母親に対して必要な支援等である。グループインタビュー時は、すべての項目に対し全員が十分発言できるよう配慮した。

4. 分析方法

分析方法は、質的記述的研究とした。録音した内容を基に逐語録を作成し、逐語録の内容をインタビューデータの意味を解釈しながら内容ごとに分類し、コード化した。分類したものを、徐々に抽象度を上げながら、カテゴリー別に類型化した。

なお、本研究の質的データの内容とカテゴリーの整合性については、第3者である社会学、心理学、看護学分野の研究者から評価を受け、修正を行った。

5. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究への参加は自由意思に

基づくものであり、参加協力を断った場合も不利益を被ることがないことを口頭にて説明した。面接の内容は、調査協力者の許可が得られた場合に録音し、個人名や地域が特定できないよう配慮した。面接調査の実施時間、実施場所については、対象者の住居近隣とし、生活への支障がないよう配慮した。本調査は、大阪府立大学看護学部研究倫理委員会において承認を得た（申請番号19-77）。

IV. 結果

インタビュー対象者の年齢は50代、60代、70代それぞれ1名ずつであった。対象者は全員出産経験があり、子どもの数は2～4人、第1子出産年齢は26～27歳である。グループ「Z」での保育ボランティア経験年数は3～4年間であり、他の5名のメンバーと交代で毎月参加していた。「Z」以外での育児支援の経験がある人も2名いた。

インタビューデータを基に、大カテゴリーとして、1. グループ参加当初の若年母親に対する認識、2. 関わりが深まってからの若年母親に対する認識、3. 若年母親に関わることの難しさ、4. 居心地のいい場づくりのための支援、5. 関係を構築する、の5項目が抽出された。カテゴリーの内容を表1に示す。

分析した結果を、カテゴリー別に記す。以下、大カテゴリーは数字表記、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》, コードを〈 〉で表す。

1. グループ参加当初の若年母親に対する認識

(1) 《関わるきっかけ》

① 〈若年母親の保育ボランティアは更生保護の務め〉

グループを主宰しているX市保健センター保健師は、当初保育ボランティアを地域の民生委員に依頼した。民生委員と更生保護女性会を兼ねているメンバーが、市からの依頼について更生保護女性会の理事に相談したところ、理事であるFさんは、民生委員としてでなく、更生保護女性会の行事として位置付けるべきであると考え、ボランティアを受けることをメンバーと相談して決定した。

最初はね、(市から)民生(委員)のほうにお話が下りてきたんですよ。DさんとEさんとか「Zがあるんだけど」って(理事の)Fさんにお話ししたら、更女(更生保護女性会)で、ひとつの行事に取り入れてほしいから言うので。みんなで決めて参加させていただいたんですよ。(Cさん)

(2) 《関わり始めの若年母親の印象》

① 〈イメージ通りの若年母親〉

インタビュー対象者の中で、「Z」に最初に関わったCさんは、若年母親がグループ開始時に音楽をかけて踊りだしたり、保健師がグループ開始の声をかけても参加するそぶりを見せないといった振る舞いを見て「やっぱり」若い母親はこんな感じなのかと思い、啞然としたと語っていた。

表1 ボランティアが持つ若年母親への認識と支援

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
1. グループ参加当初の若年母親に対する認識	《関わるきっかけ》	〈若年母親の保育ボランティアは更生保護の務め〉	
	《関わり始めの若年母親の印象》	〈イメージ通りの若年母親〉 〈他の母親グループとの雰囲気の違い〉	
2. 関わりが深まってからの若年母親に対する認識	《関わりが深まってからの若年母親の印象》	〈メンバーが変わり落ち着いた〉 〈母親の行動に慣れさせられた〉	
	《若年母親流の育児を認める》	〈若くても母親として行動している〉	
		〈子どもの行動を母親に転嫁しない〉 〈自己流の育児を受け入れる〉 〈“子ども”なのに子育てをしているのは偉い〉	
3. 若年母親に関わることの難しさ	【相反する役割期待】	《母親役割を重視して若年母親をとらえる》	〈子どもをしつける親として振る舞うべき〉 〈子どもより親の欲求を優先している〉
		《10代であることを重視して若年母親をとらえる》	〈自分を優先する事は仕方がない〉 〈いざとなれば子どもを一番に考えると信じる〉
	【若年母親との距離の取り方の難しさ】	《若年母親側の認識を知りたい》	〈どのような存在ととらえているのか知りたい〉
		《拒絶されることへの恐れ》	〈関わることで疎ましく思われることへの恐れ〉
		《積極的にかかわることの難しさ》	〈母親たちの周囲の人から助言をもらってほしい〉 〈母親側から話しかけてくれればより親しくなれる〉
		《小言は言わない》	〈子どもを見守ることがボランティアとしての役割〉 〈ほっとできる場づくりに徹する〉
4. 居心地の良い場づくりのための支援	《グループに來所しやすい雰囲気づくりに徹する》	〈親しみを持って話しかけてくれた〉	
5. 関係を構築する	《母親たちとの関係構築》		

カセットをバーッとかけて音楽鳴らして、パーッと踊ったりね。「始めますよ」言うても何かちょっと…。「ああ、やっぱり10代のお母さんってこんな感じなんかな」と思って、ちょっと最初は啞然としましたけど。(Cさん)

② 〈他の母親グループとの雰囲気の違い〉

ボランティアは、他の母親サークルでも支援をおこなった経験があり、グループ「Z」は他のサークルの母親と雰囲気が違うと感じていた。

言ったら悪いですけどね。(他の母親サークルに) 来てるお母さんと、ちょっと違いますね。(他のサークルは) 年代上やから。雰囲気がっていうのか、何かな。(Cさん)

やっぱり外見とか、そういうの。(Aさん)

おとなしめ?(Bさん)

向こう(のサークル)はね。(Cさん)

2. 関わりが深まってからの若年母親に対する認識

(1) 《関わりが深まってからの若年母親の印象》

① 〈メンバーが変わり落ち着いた〉

参加当初はメンバーの振る舞いに啞然としていたボランティアだが、最近は落ち着いた感じの母親が多くなったと語った。子どもの就園や本人の希望によりグループを辞めるなどして、年々メンバーは入れ替わるため、開始当初と現在のメンバーの印象は異なると全員が語っていた。

この頃、みんな落ち着いたお母さんが多いからね。全然、もう最初とは(違う)。(Cさん)

② 〈母親の行動に慣れさせられた〉

Bさんは、「Z」に参加するメンバーの顔触れが変わっただけでなく、自分自身が、何回か若年母親と接した上で、彼女たちに対する認識が変化しているにとらえていた。Bさんは、自身のこうした変化を「慣れさせられた」と表現していた。

もう(母親たちに)慣れさせられたというか。こちらのほうがね。だんだん慣れたというか。向こう(母親たち)がちょっとおとなしなったというか。そこは定かじゃないですけどね。

(Bさん)

(2) 《若年母親流の育児を認める》

① 〈若くても母親として行動している〉

ボランティアは、他のサークルとの雰囲気の違いは感じつつも、それは年齢が若いからであり、グループにおける様子から、母親としての振る舞いや育児は一生懸命にやっているだろうと考えて

いた。

(グループ「Z」は) 年がそんだけ若いいうだけで、ちゃんとお母さんはしてはるん違うかなと思いますけどもね。(Aさん)

あの子らはあの子らなりに、一生懸命(子どもを)みてるんやろなと思いますね。(Bさん)

② 〈子どもの行動を母親に転嫁しない〉

Cさんは、子ども達が多少乱暴に振る舞うことについても、年齢相応の行動であり、母親が何歳であろうと関係ないととらえていた。

友達にポンと積み木投げたりすんのは、どこの子もするでしょ?遊んでる間にね。どこの子どもでも小ちゃい時は、そんなんは結構ケンカみたいな感じですよ。何回か見ましたけど。それは誰でも、(親が)10代ではなくてもすることやからね。(Cさん)

③ 〈自己流の育児を受け入れる〉

ボランティアは、若年母親に対して世代の違いを感じており、季節に合わない服装をしている時は、助言したくなることもあると言う。しかし、それも10代である若者の特性であり、子どもを産んで親になっても、若いうちに自分の思うようにしたいのだろうと考え、若者らしい服装を受け入れようとしていた。

(冬場に)背中見えてる子もおるしな。しゃあないわ思って。若いうちに何でもしたいんやから、子どもはもう別やねんやろな思うわ。自分のおしゃれになったら。(略)だから、今は何も言うたって。自己流で行きはるやろな思うわ。(Bさん)

④ 〈“子ども”なのに子育てをしているのは偉い〉

インタビューの中でボランティアは、若年母親を「子どもみたい」と述べる場面もあった。ボランティアは、若年母親達の努力は評価しているが、まだ「子ども」であるにとらえている。そうした認識のもと、「子ども」なのに「母親」としてちゃんとやっていることが「偉い」というように、若年母親の育児を寛容的に受け止め、受け入れようとしている様子が見られる。

(母親の)年齢考えたらね、偉いわと思う。

(Cさん)

そう。やっぱり、みんな遊びたい。(Aさん)

まだ、ご自分が子どもみたいな感じですよんね。(Bさん)

3. 若年母親に関わることの難しさ

1) 【相反する役割期待】

(1) 《母親役割を重視して若年母親をとらえる》

① 〈子どもをしつける親として振る舞うべき〉

Cさんは、若年母親に最も必要だと思うことは「人の話を聞く」姿勢だと考えていた。保健師が「Z」が始まる時のあいさつや、今日の流れの説明をしていても、メンバーが友達と話をしている様子を見て、もう少しけじめをつけて欲しいという思いを持っていた。

Bさんも、子どもをしつける存在として、若年母親自身も親らしく振る舞って欲しいと望んでいた。

(メンバーは) 人の話聞きやれへんわね。それが一番(必要だと思う)。(保健師が)説明してはっても、こっちの友達と隣同士で話したり、(略)「今から(Zを)します」言うても、お隣同士でピャーと話したりしてやるから。ああいうの、もうちょっとけじめつけた方が。

(Cさん)

一応、親やねんからね。その(人の話はきちんと聞くという)こと、子どもに言うて聞かせていかなあかんねんからな。(Bさん)

② 〈子どもより親の欲求を優先している〉

Aさんは、Aさんの世代が育児をしてきた時代は子どもを第一に考えてきたが、若年母親は子どものことよりも自分のことが優先となってしまいがちであると感じていた。

前、七夕様の願い事とか、そういうのも子どものことを元気で何とか、って書いてはるお母さんもあるけども、自分のこと?何かが欲しいとかね。そういうの書いてはる人も、たくさんいてはる言うてはったから。(略)そういう(自分を優先している)のはちょっと感じるかな。私らの時はね、子どもが第一というか、そういうので来ましたからね。そういうのが、ちょっと分からないかな。(Aさん)

自分犠牲にしても子ども優先やもんね。昔はね。今はどうなんやろね?(Cさん)

(2) 《10代であることを重視して若年母親をとらえる》

① 〈自分を優先することは仕方がない〉

Bさんは、先述の「七夕で自分の願い事を書く」母親に対し、母親達の年齢を考えると、自分を優先することは仕方がないという思いを持っていた。

そら(子どもよりも自分のものを)欲しいと思うわ。年からいうとな。子どもよりも親のほうかな。そんな思ってもええ年齢やわな。

(Bさん)

② 〈いざとなれば子どもを一番に考えると信じる〉

Aさんは、自分中心に考えているように見える若年母親も、いざとなれば子どもを一番に考えるだろうと「信じて」いた。

いざとなったら子どもをね、あれしやる(第一に考える)とは信じてますけど。(Aさん)

2) 【若年母親との距離の取り方の難しさ】

(1) 《若年母親側の認識を知りたい》

① 〈どのような存在ととらえているのか知りたい〉

Bさんは、ボランティアがどのように母親から認識されているのか気にかけている。しかし、母親側からボランティアに声をかけることは少なく、どのように思われているのだろう、自分達に気を許してくれているのだろうか、という思いを持っていたが、自分の中にとどめていた。

どない向こう(母親たちは)思っってはるのかなって、私は思ったりするんですわ。だから、おばちゃんらに気許してくれてるんやろかなあ。どんな目でおばちゃん達を見てはんのかなあ、って思ったりするんですわ。(Bさん)

(2) 《拒絶されることへの恐れ》

① 〈関わることで疎ましく思われることへの恐れ〉

Bさんは、若年母親に積極的に話しかけるのを躊躇する理由として、こちらが親切と思ってしたことが、相手側はどう受け取られるか分からないこと、相手のバックグラウンドが分からないことを挙げていた。

あの子なんか、1人しょんぼりしてたら、ちょっと声かけてあげたいけどなあ。余計なことなんかああって、1人思ったりする時あるんですわ。「小さな親切、大きな迷惑やったら困るしな」思うて。(Bさん)

(3) 《積極的にかかわることの難しさ》

① 〈母親たちの周囲の人から助言をもらって欲しい〉

ボランティアは、参加当初のスタッフからの助言や、《拒絶されることへの恐れ》を持っていることから、「自分から積極的に関わることはできないが、何か困ったことがあれば、周囲の人に助言をもらって欲しいという思いを持っていた。

困ったことがあったら、周りの人に（Bさん）助言してもらってね。（Cさん）
 ちょっと声かけてくれはったらええかなと思うだけで、こちらから言うていく事はないと思うんですけどね。（Bさん）

② 〈母親側から話しかけてくれればより親しくなれる〉

Bさんは、〈疎ましく思われることの恐れ〉から、ボランティア側から話しかけにくいと考えていた。そのため、母親側から話しかけてくれればより親しくなれるのではないかと感じていた。

嫌でなかったら、向こうからお話しなさっていただいたほうがね。より親しくなれるんじゃないかなと思ったりしますね。（Bさん）

4. 居心地の良い場づくりのための支援

(1) 《グループに来所しやすい雰囲気づくりに徹する》

① 〈小言は言わない〉

ボランティアが行っていた支援として、来所しやすい雰囲気作りへの配慮が挙げられた。ボランティアは、若年母親達が育児に対して既に周囲から意見されているだろうと考え、これ以上ボランティア側から意見することで、母親がグループに来にくくなることを恐れていた。

家で言われてたとして、ここへ来てまたそんな小言みたいなこと言われんのが、嫌やって思っ
て来はらへんようになったらいかんもんね。そやから、なんにも（言わなかった）ね？（同意を求める）。ただもうここへ来て、なんかあったら、「どうしたん？」「ここ、ケガしてやった。どうしたん？」とか、そんなことぐらいは聞くけど。なんにも「ああしたらいいよ」とか「こうしたらいいよ」とかは言わなかったですね。（Cさん）

② 〈子どもを見守ることがボランティアとしての役割〉

ボランティアは、子どものことで母親に意見することに対して「自分の子でもない」からと配慮をしている。そして子どもをきちんと見守ることが、自分達の役割であると認識していた。

（グループに）来やすいようにね、してあげな。私らでも家でも自分の子でもないのに、孫にポンポンと言うでしょ。そんな言わんとこかな思うねんけど、つついね。そういうこと言われたら、その子自身も嫌やんか。そやから、なる

べく言わんほうがええの違うかな。ただ、赤ちゃんさえちゃんと見守ってあげたら、もうそんでいいのかなと思ってね。（Cさん）

③ 〈ほっとできる場づくりに徹する〉

ボランティアは「Z」において、親切心で言った言葉も、相手に対してどう響くのかかわらないと考え、母親達がほっとできる場づくりに徹し、母親達が居心地良い空間を作れるように配慮していた。

ここへ来たらもうほっとしたいからね。もうよそからはいろいろ聞きたくないと思うけどね。（Cさん）

親切がな、ひよっとしたら向こうに対してな、苦い言葉になってもいけないし。ここへ来て、ほっとしに来てはんのやったらそれ（こちらから声をかけない）がベストじゃないですかね。（Bさん）

5. 関係を構築する

(1) 《母親達との関係構築》

① 〈親しみを持って話しかけてくれた〉

若年母親達に「慣れさせられた」というBさんは、「しよんぼりしている母親に声をかけてあげたい」といった、若年母親と積極的に交流したいという思いを持っている。こうした思いに共鳴したのか、母親もBさんに対し気安く話しかけてくることもあるという。

さっき隣で気安く…まあ話し方はね、ちょっと。でも、案外なんか親しみ持ってくれるような、もの言いをしてくれはったからね。ああっと思ってたんやけど。さしてそんなに（母親達が）変わったとは思わないんですけどね。（Bさん）

V. 考察

結果に基づき、ボランティアの若年母親に対する認識の変化及び支援のあり方について考察する。

1. ボランティアが持つ若年母親への認識の変化と支援

ボランティアが持つ若年母親の認識と支援について、[図1]に示した。

若年母親は、「10代」であり「母親」であるという、2つの側面を持っている。こうした母親達を支援するボランティアは、それぞれの役割期待の中で葛藤している様子が見られた。またボランティアと母親との関わりの中で、〈どのようにと

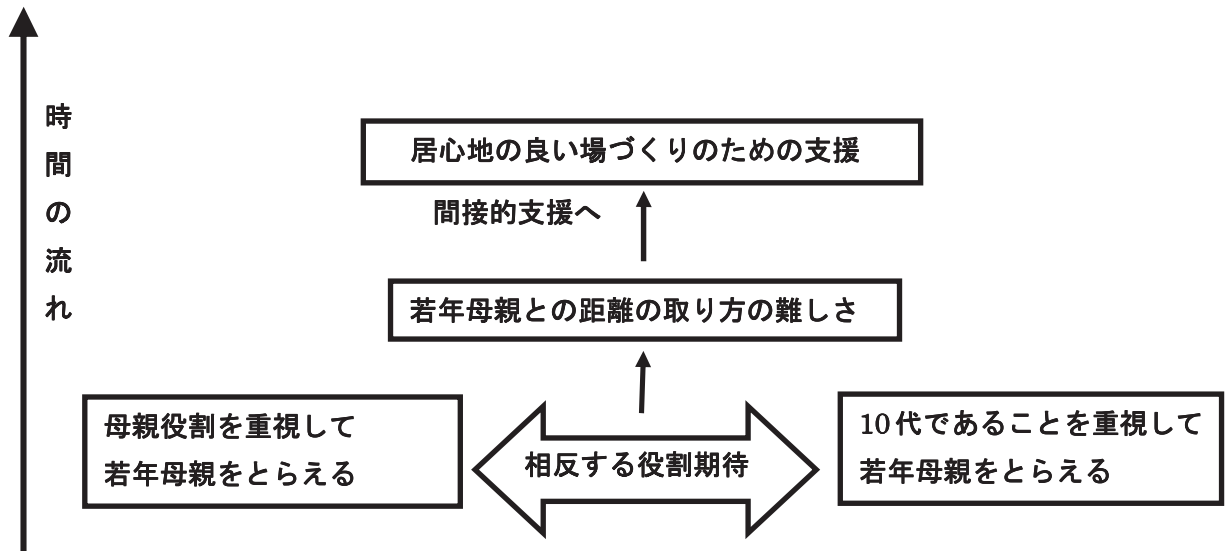


図1 ボランティアが持つ若年母親への認識の変化と支援

らえられているのかを知りたい」という思いはあるが、《拒絶されることへの恐れ》から、関わりたいという思いを持ちつつも若年母親達に積極的に関わる事ができない状況にあった。しかし、直接的に関わらなくとも、〈子どもを見守ることがボランティアとしての役割〉と考え、〈ほっとできる場づくりに徹する〉ことで、ボランティアは若年母親を間接的に支援している。このことから、ボランティアは「Z」において母親達と関わる上で距離の取り方に戸惑いつつも、適度な距離感を保ち、関係を構築していくきっかけを作っていると考えられた。

若年母親は、年齢の違う母親や近隣住民からの認識を敏感に感じ取っており（大川，2010）、もしボランティアが小言ととらえられるようなことを言えば、若年母親との関係を築くことは困難であったろう。ボランティアはこれまでの支援の積み重ねから、自分自身の「母親」という枠にとらわれず、少し想像力を広げ、自分たちの思う「親切」が彼女たちにとって「苦い言葉」ととらえられるのを恐れ、パターンリズムに陥らないよう自身の役割を「見守り」ととらえ、場づくりに徹していた。ボランティアに親しみを持って話しかけてくる母親もいることから、母親達もボランティアの役割に気づいており、お互いに理解を深めようとしている過程にあると考えた。このように、地域住民が若年母親の実態を知る機会を作ることが、若年母親の育児支援の一つとして必要であると考えられた。

2. 若年母親にボランティアが関わる意義

「更生」を目的にボランティアへ参加する更生

保護女性会メンバーと、「同年代の母親との交流」を目的に集まってきた若年母親達という、目的が異なるグループが機能する背景に、母親同士という仲間意識と土着性があると考えた。ボランティアは、グループでの若年母親の振る舞いに戸惑いつつも、〈いざとなれば子どもを一番に考えると信じる〉といった、母親である者同士の期待を持って若年母親達をとらえていた。近隣住民からの意識を敏感に感じる母親達も、ボランティアを受け入れ、グループは機能している。田間（2001）は、ある個人が、「女性」というアイデンティティを持ち、それが個人にとって重要なアイデンティティである場合、その個人は自己の重要なアイデンティティを維持するためという理由によって母性を主体的に内面化しやすいという。ボランティアは、母性を主体的に内面化したことにより、同じ「母性」を持つ10代の母親たちを、愛情を持ったまなざしで見守り、支えていた。同じ地域に住み、生活圏域をともにしているという土着性も、若年母親がボランティアに親しみを増す要因となっていると考えられた。

3. 若年母親を支える地域づくり

グループ「Z」において、ボランティアと母親達とをつなげたのはX市の保健師であった。地域から孤立しやすい人々と地域住民を仲介する役割として、保健師の役割は大きい。保健師の多くは保健所、市町村等の行政機関に所属し、支援が必要な対象者に向けて、個別あるいはグループ支援を行っている。また、地域住民の組織化活動を行っており、地域の住民活動にも精通している。こうした特徴を生かして、保健師は支援が必要な

人と地域住民を仲介し、関係構築を促す機会を提供できると考える。

Granovetter (1973) は、弱い紐帯は、社会移動の機会をもたらす重要な資源であるという。若年母親がグループ「Z」等で、親族でなく同世代の母親でもない、異なる立場を持つ人々と弱い紐帯を構築することで、若年母親が社会的に不利な状況から移動する機会を作り、地域に受け入れられていると認識することができると考えられる。このような場を継続的に設けることが、若年母親だけでなく、地域住民同士がともに支えあう地域づくりの一助となると考える。

研究の限界

本研究は対象者が3名と少なく、また一部の団体のメンバーの語りであることから、得られた内容に偏りがある。しかし、住民ボランティアの若年母親に対する認識について一定の知見を得ることができたと考える。

おわりに

本稿は、住民ボランティアへのインタビューを通して、地域における若年母親と住民ボランティアの関係構築過程について明らかにした。グループ「Z」のような地域における支援枠組みを構築していくことで、若年母親が育児をしやすい環境を整えるのみならず、固有の支援を必要とする人々が、ともに支え合える地域づくりの第一歩となると考える。

謝辞

インタビューにお答えいただき、いつもグルー

プ「Z」を温かい雰囲気の中で包んでいただいた更生保護女性会の皆様、またインタビュー実施時にご協力いただきました、グループ「Z」の歴代スタッフの皆様に感謝を申し上げます。

脚注

- 1) 日本では、20歳未満の出産が若年出産として定義されている(定月, 2009)ことから、若年母親を対象とした論文の多くは20歳未満で出産した母親を対象としている。一方で、高校卒業年齢である18歳など、年齢でなく学業の段階に合わせて若年出産が定義される場合もある。

引用文献

- Barnet, B., et al, (2002): The Effect of Volunteer Home Visitation for Adolescent Mothers on Parenting and Mental Health Outcomes, A Randomized Trial, *Archives of Pediatrics and Adolescent Medicine*, pp1216-1222.
- Granovetter, S., (1973): The Strength of weak ties, *American Journal of sociology*, 1973(78), pp1360-1380 (=野沢慎司, 2006, リーディングスネットワーク論, 家族・コミュニティ・社会関係資本, 第4章, 大岡栄美訳, 弱い紐帯の強さ, pp123-158)
- Greene, S., (2007): Including Young Mothers: Community-based participation and the continuum of active citizenship, *Community Development Journal*, 42(2), pp167-180.
- Marshall, T.H., Bottomore T., (1992): *Citizenship and social classes*, 1992 (=岩崎信彦, 中村健吾訳, シティズンシップと社会的階級, 法律文化社, 1993)
- 大川聡子 (2010): 10代の母親が社会化する過程において、顕在化する支援ニーズ, *立命館産業社会論集*, 46(2), pp67-88.
- 定月みゆき (2009): 若年妊娠・出産・育児への対応, *母子保健情報*, pp53-58.
- 田間泰子 (2001): 母性愛という制度—子殺しと中絶のポリテイクス, *勁草書房*, p17.